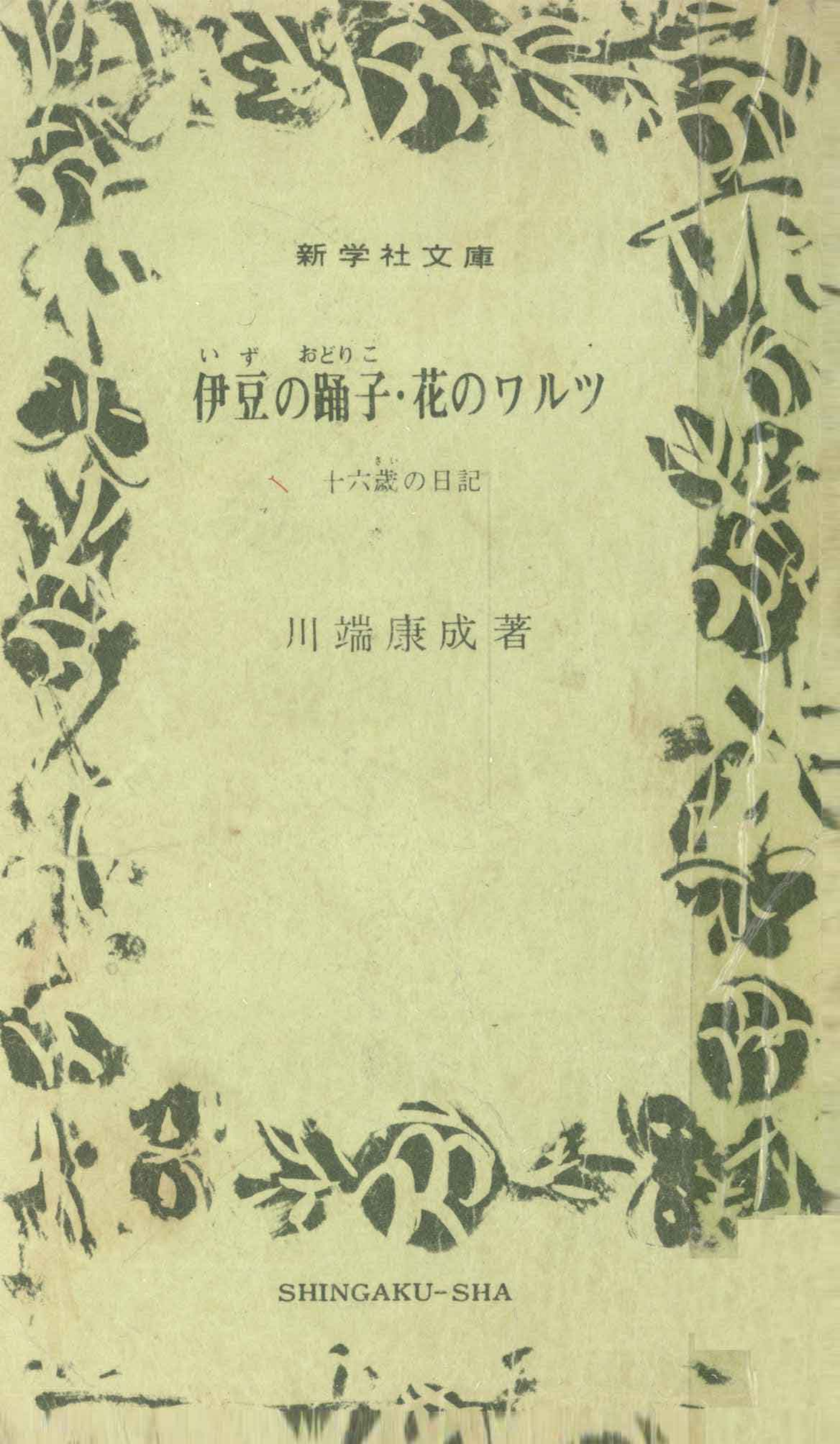




新学社文庫

いず おどりこ
伊豆の踊子・花のワルツ

十六歳^{さい}の日記

川端康成 著

SHINGAKU-SHA

新学社文庫発刊のことば

人生の大きいよろこびの一つは、ことばと文字をもち、読み書きのすべを伝授されたことにある。これあるがゆえに人は、ひとりひとりの寿命こそ短い、祖先から子孫に通じて文化の継承という永遠の発展性を持ち、宇宙の秘められた調和と法則をも解明することができ、また個人の生涯においても、人は読書により古今の賢者を師として、はるか数千年の歴史をさかのぼり、また広く東西の知識を学ぶことができるが、読書を外にしては祖先がのこしてくれた文学上の大いなる財宝や、真実な朋友、親切な忠告者、愉快な伴侶を得ることがむずかしいであろう。良書は何をおいても読むべきである。弊社はここに新学社文庫を発刊するにあたり、多感にして吸収力に富む若き日にぜひ一読すべき良書を精選して広く若人にすすめ、愛読をこいねがう。

昭和四十三年五月

奥 西 保

監修 武者小路實篤 麻生磯次 三輪知雄

伊豆の踊子・花のワルツ他一篇

新学社文庫

昭和43年5月1日 発行

検	印
省	略

著	者	川	端	康	成
発	行	者	奥	西	保
印	刷	者	船	先	悦
			収		

東京都文京区本郷3丁目
 発行所 16の4 振替 東京 97860 株式会社 新学社教友館
 京都市東山区山科東野井上
 町48の6 振替 京都 7017

落丁・乱丁本はお取替いたします

天理時報社印刷 A

新学社文庫

伊豆の踊子・花のワルツ

川端康成 著



新 学 社

贈

呈

伊万里市日中友好協會

川端さんの文学について

二十数年前の真冬一月間ばかり、私は四万温泉の宿に一人こもって、川端さんの諸種の作品集を読みあさったことがあった。ミザンスロヒストのストリンドベリーを川端さんが好きだと云ったか書いたかしたのに、心惹かれたためだったように記憶している。

川端さんの作品は、つめたいものではなかった。伊豆の春色を描いた作品の中に、雄蕊が空にむかって金の弓をひきしぼっているような、といった梅花の美しい描写にであわして讃嘆した。

こうした誰にも真似のできない特異の感覚と表現とその着想は、繊細典雅な川端文学の一貫した独自の境地であり、あわせて日本文学の永遠の花となっている。

中山義秀

(芸術院会員・作家)

原文は、新かなづかいに改めたほか、現代表記法にもとづき、現行国語教科書を標準として漢字を削減した。各作品とも冒頭部分のふりがなをふやし、文章中の難解語句・事項については見開き二ページ単位を原則として傍注を加えた。

（編集部）

目次

川端さんの文学について	中山 義秀	三
伊豆の踊子		九
花のワルツ		五
十六歳の日記		一七
解説		
川端康成の人と作品	鈴木助次郎	二三
読書のしかた	馬場 正男	三三
——康成「伊豆の踊子・花のワルツ・十六歳の日記」の読解と鑑賞		
年譜		三九

装丁

棟方志功むなかたしこう

扉板画

棟方志功

さしえ

長谷川富三郎はせがわとみさぶろう

伊豆の踊子

一

道が^①つづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思うころ、雨足が杉の密林を白く染めながら、^②すさまじい早さで麓から私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけて

いた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊まり、湯が島温泉に

二夜泊まり、そして朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や

深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。

そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲がった急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北

口の茶屋にたどりついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすく感でしまった。あまり

に期待がみごとに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子が^③自分の座蒲団をはずして、裏返しに傍へ置いた。

「ええ……。」とだけ言って、私はその上に腰をおろした。坂道を走った息切れと驚きとで、

「ありがとう。」という言葉が咽にひっかかって出なかったのだ。

返句

踊子と真近まじかに向かい合つたので、私はあわてて袂たもとから煙草たばこを取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆ぼんを引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙だまっていた。

踊子は十七くらいに見えた。私にはわからない古風の不思議な形に大きく髪かみを結ゆっていた。それが卵形たまごがたの凛々りりしい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張こちやうして描えがいた、稗史はいし的な娘の絵姿えすがたのような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏しるしはんてんを着た二十五、六の男がいた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯が島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓たいこを提ひげていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情りょじやうが自分の身についたと思った。それから、湯が島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄関げんかんの板敷いたじきで踊るのを、私は梯子段はしごだんの中途に腰をおろして一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯が島なら、明日は天城あまぎを南に越えて湯が野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できつと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋ちややでびったり落ち合ったものだから、私はどぎまぎしてしまったのだ。

七十八下

まもなく、茶店の婆ばあさんが私を別の部屋へやへ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子としょうじがなかった。下をのぞくと美しい谷が目の届とどかないほど深かった。私は肌はだに粟粒あわつぶをこしらえ、かち

かちと齒を鳴らして身ぶるいした。茶を入れに來た婆さんに、寒いと言うと、

「おや、旦那様お濡れになつてゐるじゃございませんか。こちらでしばらくおあたりなさいまし、さあ、お召物をおかわかしなさいまし。」と、手を取るようにして、自分たちの居間へ誘つてくれた。（实际的な服）

その部屋は炉が切つてあつて、障子を明けると強い火氣が流れて來た。私は敷居ぎわに立つて躊躇した。水死人のように全身蒼ぶくれの爺さんが炉端にあぐらをかいてゐるのだ。瞳まで黄色く腐つたような眼を物憂げに私のほうへ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれてゐると言つてもよかつた。とうてい生き物と思えない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになつてゐた。

「こんなお恥かしい姿をお見せいたしました……。でも、うちのじじいでございますからご心配なさいますな。お見苦しくても、動けないのでございますから、このままで堪忍してやつてくださいまし。」

①葛のつるのように幾重にも折れ曲がつて（山道）いる意味。②伊豆半島中央部の死火山（富士火山脈に属する、海拔一四〇五メートル）山の坂路を登りつめた所。杉・檜が多い。③伊豆半島北部（静岡県田方郡）にあり、弘法大師が発見したという温泉がある。④朴の木で作った日和下駄、旧制高等学校の一風俗であつた。⑤シナで昔、民間の様子を探知して王に報告をする稗官（小役人）が、世間の事情やうわさを歴史風に書いたもの。転じて小説のこと。⑥襟・背などに家号・氏名などの標識を染めあらわした上衣。法被。

そう断ことわってから、婆ばあさんが話したところによると、爺じいさんは長年ながねん中風ちゅうふうを患わづらって、全身が不随ずいになってしまっているのだそうだ。紙の山は、諸国しよこくから中風の養生ようじやうを教おしえて来た手紙や、諸国から取り寄よせた中風の薬くすりの袋ふくろなのである。爺さんは峠とうげを越こえる旅人たびびとから聞いたたり、新聞の広告を見たりすると、その一つをももらさずに、全国から中風の療法りやうほうを聞き、売薬ばいやくを求めたのだそうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨すてずに身の周りに置いて眺ながめながら暮くらして来たのだそうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古はんこの山を築きずいたのだそうだ。

私は婆さんに答える言葉もなく、囲炉裏いろりの上にうつむいていた。山を越こえる自動車自動車が家を揺すぶった。秋でもこんなに寒い、そしてまもなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんはおられないのだろうと考えていた。私の着物から湯気ゆげが立たって、頭が痛いたむほど火が強かった。婆さんは店に出でて旅芸人の女と話していた。

「そうかねえ。この前連つれていた子がもうこんなになつたのかい。いい娘あんこになって、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗きれいになつたのかねえ。女の子は早いもんだよ。」
長久保 七郎 真快所

小一時間経たつと、旅芸人たちが出立いでたつらしい物音が聞こえて来た。私も落ち着おいている場合ではないのだが、胸騒むなさわぎするばかりで立ち上がる勇氣ゆうきが出でなかつた。旅馴なれたと言いっても女の足だから、十町じうちうや二十町遅おくれたって一走りに追おいつけると思おもいながら、炉ろの傍そばでいらいらしていた。しかし踊子おどりこたちが傍そばにいなくなると、かえって私の空想は解とき放はなれたように生き生き

と踊り始めた。彼らを送り出して来た婆さんに聞いた。

「あの芸人は今夜どこで泊まるんでしょう。」

少々

「あんな者、どこで泊まるやらわかるものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだって泊まるんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか。」

はなはだし軽蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊まらせるのだ、と思ったほど私をあおり立てた。

雨足が細くなつて、峰が明るんで来た。もう十分も待てば綺麗に晴れ上がると、しきりに引き止められたけれども、じっと坐っていられたかった。

「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりますからね。」と、私は心から言つて立ち上がった。爺さんは黄色い眼を重そうに動かして微かにうなずいた。

「旦那さま、旦那さま。」と、叫びながら婆さんが追っかけて来た。

「こんなにいただいてはもったいのうございます。申し訳ございません。」

そして私のカバンを抱きかかえて渡そうとせず、いくら断わつてもその辺まで送ると言つて承知しなかった。一町ばかりもちよこちよこついて来て、同じことを繰り返していた。

①書画などをかきよごし、あるいは書き損じた不用の紙。ほぐ。ほうぐ。ほんご。ほうご。ともいう。②土地の面積の単位。距離の単位での一町は六十間で、約一〇九メートル強。

「もったいのうございます。お粗末いたしました。お顔をよく覚えております。今度お通りの時にお礼をいたします。この次もきつとお立ち寄りくださいまし。お忘れはいたしません。」

私は五十銭銀貨を一枚置いただけだったので、いたく驚いて涙がこぼれそうに感じているのだった。が、踊子に早く追いつきたいものだから、婆さんのよろろした足取りが迷惑でもあった。とうとう峠のトンネルまで来てしまった。

「どうもありがとう。お爺さんが一人だから帰ってあげてください。」と私が言うと、婆さんはやつとのでかばんを離れた。

暗いトンネルにはいると、冷たい雪がぼたぼた落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。

二

閃電

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。この模様のような展望の裾のほうに芸人達の姿が見えた。六町と行かないうちに私は彼らの一行に追いついた。しかし急に歩調を緩めることもできないので、私は冷淡なふうに女たちを追い越してしまった。十間ほど先に一人歩いていた男が私を見ると立ち止まった。

慢々地

如彩重負

「お足が早いですね。——いいあんばいに晴れました。」

私はほっとして男と並んで歩き始めた。男は次ぎ次ぎにいろんなことを私に聞いた。二人が話し出したのを見て、うしろから女たちががばたばた走り寄って来た。

男は大きい柳行李①やなぎこうりを背負せおっていた。四十女は小犬を抱だいていた。上の娘が風呂敷包み、中の娘が柳行李、それぞれ大きい荷物を持っていた。踊子は太鼓とその杵きねを負おうていた。四十女もぽつぽつ私に話しかけた。

情声流

「高等学校の学生さんよ。」と、上の娘が踊子に囁ささやいた。私が振り返かえると笑わらいながら言った。「そうでしょう。それくらいのことは知っています。島へ学生さんが来ますもの。」

一行は大島の波浮はぶの港の人たちだった。春に島を出てから旅を続けているのだが、寒くなるし、冬の用意はして来ないので、下田しもだに十日ほどいて伊東温泉いとうから島へ帰るのだと言った。大島と聞くと私はいつそう詩を感じて、また踊子の美しい髪かみを眺ながめた。大島のことをいろいろたずねた。

一風雪

「学生さんがたくさん泳ぎに来るね。」と踊子が連れの女に言った。「夏でしょう。」と、私が振り向くと、踊子はどぎまぎして、

①こりやなぎ（行李柳）の新枝の皮をはぎ、乾燥させたものを麻糸あさいとで編あんだこうり。上等品はかどに革かわかズツクをぬいかぶせて耐久力をもたせてある。

②伊豆半島東岸の良港で、温泉地（静岡県しずおかの市）。昭和二十二年市制。